

講演「これから10年、日本はどう変わるか」

作家 水木 楊氏(02-10)

「2025年、日本の死」「銀行連鎖倒産」などの経済小説で著名な水木さんですが、文藝春秋5月号に載った「2007年、合衆国日本州誕生す」が、たいへん話題になりました。元日本経済新聞社取締役論説主幹という経歴だけあって、その“シミュレーション”は実に生々しい。厳しいと言われるこれからの日本、10年後どんな社会になり、どう対応すれば良いのかを語ります。

- *まず中国と米国の将来。中国は5~7%の経済成長は続けるだろうが、同国が抱えている内部矛盾(経済の自由化と政治の民主化)が必ず激化する筈。米国はその一極支配体制が揺らぎ始めた。経済の凋落、NYテロで米国にもカントリーリスクのあることが表面化、大企業の会計不信...等が原因だ。両国とも不確実な時代に入った。
- *日本の将来、まず国内の統治システム。政治は自民党のような半永久政権は終わり「大空位時代(神聖ロマ帝国の皇帝が空位だった時代)」が訪れ、政治、官僚、民間との関係がぐらつく。官僚もかつてのような「力」はなくなる。では、このまま日本は沈没するのか? 答えは「イエス&ノー」。厳しい後に今出つつある新しい芽が開花する。
- *この10年、上場企業の数が増えている。その特徴は、地方に本社のある企業、流通サービス業、会社名がカタカナ...これらの企業が圧倒的に多いということ。「失われた10年」と言われるが、マーケットに登場した企業の数、内容からみると、非常にダイナミックな変化があったと言える。民間はたくましく生きているのだ。
- *今後の10年、確実に到来するのが高齢化社会だ。この社会をマイナスと思うか、プラスに捉えるか? 「老人医療費が高む」「潜在成長率を引き下げる」などのマイナスは確かにある。が、それを避けることも不可能ではない。例えば長野県。大変な長寿県だが、老人医療費が抜群に低いのだ。私はこの理由を調べて、或る雑誌に書いた。
- *その理由、老人の病院にいる時間が少ない(往診が多い)、老人の就職率が高い。離婚率が非常に低い。それにも増して成功している最大の要因は「保健婦制度」だと思う。保健婦さんが地域の健康リーダーとなって、病気の予防を奨励しているのだ。彼らの合言葉は「PPK(ピンピンコロリ)」。死ぬ瞬間まで元気に生きようということ。
- *或るシンクタンクが50才代の男女に「60才を超えたら、したいことは何か?」というアンケート調査をした。一位が国内外旅行、二位はボランティア活動だった。高齢者の多い社会は間違いなく活動的なものになるということ。2015年、4人に一人が65才の社会になる。これは「3000万人の大きなマーケット」の到来を意味している。
- *鬼怒川温泉に笑いの止まらぬホテルがある。何をやっているか? それは「65才以下の人はお泊めいたしません」。この層には3つのメリットがある。時間が自由になるので融通がきく。団体さんで来た客を詰め込んでも文句は言わない(集団疎開の経験者が多いせい)、お土産を多く買う。高齢化社会には面白い可能性がある。
- *10年後はブロードバンドの時代に入る。コンピュータがテレビ化するのだ。何が起きるか? 商品経済に機能経済が加わる。例えば稟議書の判子。判子ソフトに予め登録しておき画面に取り出しクリックして次へ転送するなどだ。「消中(中抜き)時代」が来る。頭を使わない代理店、仲介業が不要になる。銀行などはその典型だ。
- *高齢化やブロードバンド時代になると、ビジネスの重要なキーワードは5つの「コウ」だ、旅行、学校、健康、代行、不幸。は高齢者に特化する。は大学よりもカルチャーセンターが良い。はエステ、マッサージ、健康食品。はアウトソーシング。は不幸産業...「お別れ会」「追悼式」を演出するホテルが繁盛する。
- *これからは「自分好みの時間」によって価値判断する時代になると思う。例えば新庄選手。あのドケチ球団が「4番と12億円」を用意したのを蹴って、2000万円のメッツに行ってしまった。これを「新庄現象」と言う。日本人は昔から「花鳥風月」を愛でる時間選好型ライフスタイルの達人だった。10年後、その傾向がますます高まる。